

後志【寿都町】

なかがわ くりこ
中川 久理子さん 寿都町立寿都診療所 医師

1976年生まれ、苫小牧市出身。北大医学部卒業後、室蘭市にある日鋼記念病院の家庭医療研修を受け、2005年に町立寿都診療所へ。現在、9歳の長男、6歳の次男、4歳の長女、0歳の三男の4児の母で現在育児休業中。4月から外来担当として復職予定。



患者の気持ちに寄り添う医療を

きっかけ

母が看護師で、子どもの頃から勤め先の病院に出入りするなど医療が身近にありました。医師を目指したのは高校生の時で、幼い頃に読んだマザー・テレサの生き方に共感し、人に役立つ仕事がしたいとの想いからです。大学卒業後、家庭医療研修を受ける一方、医師である夫が、2005年に道から町に移管された寿都診療所の所長として勤務することがきっかけで、同じ診療所で勤務するため寿都町に移り住みました。その後、4人の子どもの恵まれ、現在は育休中ですが、この4月から職場に復帰する予定です。

苦勞

研修医の頃は、朝から晩まで病院にいる環境が普通と思っていました。しかし、2007年に長男を出産し育休を終えた後、研修が1年間残っていて、フルタイム勤務でした。この時は当時1歳の息子に朝寂しそうに見送られ、夜会えないこともしばしば。申し訳ない気持ちがいっつもあり、つらい時期でした。研修終了後はパートタイム勤務が可能となり、家族とのだんらんや家事の時間もとれて、仕事と家庭のバランスが取れるようになりました。今があるのは、何でも相談できる夫や母、義父母の協力、そして周囲の理解があったからです。本当に感謝しています。

満足度

患者さんの中には、生活困難者や独居の高齢者など病気の背景に色々な問題を抱えていることも多く、治療だけでは解決できないこともあります。家庭医療では、看護師をはじめ介護・福祉に携わる多くの方々と共に、チームで状況改善に取り組みます。疾患治療だけでなく、住み慣れた地域で長く元気に生活するお手伝いができ、それを見届けることは大きな喜びです。また、地域の医師は、不調を訴える患者さんをまず初めに診断します。判断の難しい症状に遭遇することもあり、正確な診断には常に勉強が必要ですが、それが楽しさでもありますね。

これから

患者の気持ちに寄り添うことができると考え、家庭医療の道を選びました。今、子どもが小さい間は現状維持を目標に目の前のことをコツコツこなし、手から離れたら家庭医療の研究なども学び医師としてレベルアップしたいですね。また、女医が出産・育児を機に離職しなくても済むように、医師にとって働きやすい環境を整えていくお手伝いのできたらと思います。育児と仕事の両立に関する講演会の依頼もあり、社会のお役にたてることは受けていきたいです。

北の★女性たちへの
メッセージ

女性は仕事に加え、家事や出産、子育てなどを求められますが、それをこなした先に多くの喜びがあります。特に子どもが与えてくれる喜びは、とても大きいものです。働くお母さん、まずは目の前のことをひとつでもこなし、自分を褒めてあげてください。その積み重ねが大きな力になると信じて頑張りましょう！

後志【倶知安町】

ひの まさみ
 白野 雅美さん 立ち飲み Bar ^{カベリ} オーナー

1974年生まれ、福岡県北九州市出身。兵庫県神戸市で専門学校に通い、スノーボードのインストラクター資格を取得。新得町のサホロリゾートスキー場でインストラクターを始め、十勝で農業と出会う。2014年12月に、友人の平さんと倶知安町で立ち飲み Bar [Kaveri] を開店。農水省の農業女子プロジェクトのメンバーとしても活躍中。



オーナーの日野さん(中央)とスタッフの平満純さん(右)、中西純子さん(左)



農業女子仲間で起業、自分で作った野菜を届けたい

きっかけ

40歳までに「何かを残したい」と考えていました。十勝でスノーボードのインストラクターをしていましたが、「山を替えよう」と考えていた時期に、神戸市の友人から「立ち飲み屋をやってみないか」と言われ、ニセコ町への移住と起業を考え始めました。最終的に背中を押したのは、小惑星探査機「はやぶさ」でした。開店には多くの障害があり、開店の延期を考えたこともありました。開店前の2014年12月、はやぶさ2の打ち上げを現地で見ましたが、その姿に大感動。数々の障害を克服したはやぶさと私たちの姿が重なり「見切り発車でもやろう」と決心しました。

苦勞

開店にこぎつけるまで一番苦勞したのは、資金繰りでした。融資を受けるために金融機関に打診しましたが、最初はやはり断られ、それから様々な助成金を調べ、再度、金融機関に飛び込み、やっと開業資金のメドをつけました。私たちは、農場で働きながら店を開いています。夏は農場の繁忙期で早朝から畑に出て、店の営業を終えると、睡眠時間が3、4時間という日が続きます。それでも、自分たちの作っている野菜を食べてもらえること、自分たちがやりたかったことを実現できていることで、充実感の方が大きいです。

満足度

開店から1年を過ぎましたが、予想以上の反響に驚いています。地元の方、仕事で来ている方、ニセコ地区の外国人など町内外の様々な方々の「出会い」の場となっています。知らない方同士が楽しそうに談笑する姿は、私たちが実現したかったことで、とても満足しています。農業女子プロジェクトにも参加していて、昨年、企業の刈払機やトラクターの開発に協力しました。こうした取り組みを倶知安農業高校で話す機会がありましたが、生徒たちの農業へのイメージが変わったようで、昔とは違う農業の姿を伝えられて良かったと思っています。

これから

「2号店、3号店を出さないの?」と聞かれることがありますが、そうすると私たちではなくなる気がして、次の出店は考えていません。店で出す食材は、地産地消で自分の勤める農場や知り合いから仕入れています。将来的には、小さくてもいいから自分たちの畑を持って、店で出す野菜を作れたらいいなと思います。大きな夢は、宇宙食として宇宙に持っていったらもらえる野菜を作り、JAXA(宇宙航空研究開発機構)に納入することです。私たちに勇気をくれた、はやぶさへの恩返しとして、実現できたらいいな。

北の★女性たちへのメッセージ

私たちの座右の銘は、「ゆっくりでも止まらなければ結構進む」です。私たちが大好きなはやぶさの開発に携わった教授の言葉ですが、開店するまで、開店してからもこの言葉に励まされ頑張っています。これからも、ゆっくりでもいいから、止まらずに一步步進もうと思っています。

胆振【室蘭市】

かたいし あつみ
片石 温美さん NPO法人マリネットワーク 理事長

1966年生まれ、旭川市出身。北大工学部土木工学科卒業後、大手コンサルタント会社に入社。2001年に退社し、有限会社マリプランニングを立ち上げる。2007年に北大大学院水産科学研究院特任准教授、2012年から室工大地域共同研究開発センター准教授。博士(工学)、技術士。2015年6月に結婚し、名字が「古屋」から「片石」に。



人をつなぎ、漁師のまちをいきいきと

きっかけ

漁業は北海道の代表的な基幹産業ですが、漁師の方たちの多くは流通や販売にあまり関心を持っていません。漁村がもっと活気を持つためには、漁業の課題や魅力、将来の方向などを整理分析し、生産者と消費者を近づける工夫が必要です。都市と漁村の交流や食育活動、情報や技術の提供などを行い、生産者と消費者をつなげる活動をしたい、そんな思いでマリネットワークを2012年9月に設立しました。多くの方に助けられながら活動を続けていますが、漁村と漁業のイノベーションを少しでも進めることができれば、と考えています。

苦勞

現在、個人会員は100人以上、法人会員も30団体ほどいます。代表として自分が中心となって動くことは当たり前なのですが、組織の運営を考え、全体をマネジメントする方がもう少しいてくれたら、と思うときがあります。一人ですべてができるわけではありません。多くの方に手伝ってもらって今があります。発足から4年目を迎え、漁村を抱える地域の人口減少が進む現状を考えると、漁村の活性化は重要な課題です。活動が広がる中、しっかりとした体制をどのように作っていくかが課題かな、と考えています。

満足度

全道各地で意見交換会や勉強会を開催しています。若い漁師さんからは「こうしていきたい」という積極的な意見も出るなど、手応えを感じます。私たちの役割は、そうした声や思いをより効果的に行政に伝えたり、知識や技術をアドバイスすること。北海道開発局水産課が2008年に立ち上げた「マリビジョン女性交流会議」では、各地域からの「浜の母さん」ならではの料理レシピを紹介するなど、地域色を前面に出したレシピ集になりました。活動を通じて多くの方、特に魅力的で輝く女性たちに出会えたのは大きな財産です。

これから

漁業が活性化するためには、各地の取り組みが経済活動につながる事が重要です。主役は漁村であり、漁師の方たちの熱意が欠かせません。そうした熱意を効果的に発揮するお手伝いを、これからも続けていきます。浜の女性は、開放的でコミュニケーション力があります。そうした女性たちが漁業活性化のキーマンになると思います。彼女たちがもっと外に出て活動し、取り組みが広く知られるように、できる限り支え、つなげていきたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

好奇心が旺盛で行動的な性格ですが、仲間からの支援や先輩からのアドバイスを受けることができ、本当に助かりました。一人ですべてができるわけではありません。「自分がやる」とがんばり過ぎないで、周りの方が「手を差し伸べたい」と思ってくれるような雰囲気作りも必要だと思いますよ。

胆振【壮瞥町】

かわみなみ えみこ
川南 恵美子さん 洞爺湖有珠火山マイスター

1961年生まれ、深川市出身。大学で知り合った夫と1985年に結婚し、「湖畔の宿 洞爺かわみなみ」の女将に。2000年の自身の誕生日に有珠山が噴火。2009年、女性第1号の洞爺湖有珠火山マイスターとなる。現在、女性マイスターは8人。



火山との共生、地域防災を地域とともに全国に発信

きっかけ

北海道大学の岡田弘名誉教授がうちの温泉によく来られていて、ある時「今度、火山マイスター制度というのを始めるよ」とおっしゃいました。「私みたいな普通の人でもなれるんですか」と聞くと「いやいや、むしろ普通の人になってほしいんだよ」と。それ以前に、2000年の噴火で避難生活をした後に、久しぶりの温泉に入って「温泉って火山だな…もっと知らないといけないな」と考えたことがあり、先生の話に「これはなってみよう！」と決め、2009年の試験を受け合格しました。

苦勞

講演する機会が増えてパワーポイントを使うのですが、家族に教わりながら四苦八苦して作っています。2015年9月には「全部英語で発表して下さい」という大会（第4回アジア太平洋ジオパークネットワーク山陰海岸シンポジウム）にも泣きながら参加してきました（笑）。マイスターになった最初の時に「先生方が私たちの地域にしてくれたことに比べれば小さなことしかできない。何でもやります、どこでも行きます」と自分で自分に誓いを立てました。自分の枠をギュッと拡げて応えていかないと、と思っています。

満足度

マイスターになってからは、噴火口の視察はワクワクしますし、それが高じて、北海道大学の宇井忠英名誉教授らとアメリカやハワイの火山を見に行ったりもしました。日々勉強する中で、防災の課題に気付いたりするなど、以前の自分と比べ大きく変化しました。昨年に御嶽山の噴火があったことで、NHKの日曜討論に出演したり、箱根では講演もしてきました。地元の小学生の自然学習や修学旅行生への火山ガイドなども増え、皆さんのお役に立らせていただいているということが喜びです。

これから

どの地域でも、さまざまな防災上の悩みがあると思います。それが火山であってもなくても、マイスターの良いところをぜひ真似してほしい。「どんなところを真似したらいいの?」ということであれば、私たちは40人いますので、どんどん訪問してお話をしたい。私たちをもっと使ってほしいと思っています。そして何よりも、もしこの地域でまた噴火が始まりそうになった時に、地域の方々と一緒に2000年の時のように犠牲者ゼロを成し遂げることができたら、というのが一番の望みです。

北の★女性たちへの
メッセージ

北海道の女性って、すごくバイタリティーのある方たちが多い。火山マイスターは火山との付き合い方を考えようという先駆けですが、いろいろな分野の先駆けとなるような女性たちが、この北の大地から生まれてくれるといいなと思っています。山ガールが流行りましたが、ぜひ火山ガールにもカモン！

胆振【白老町】

なかや みちえ
中谷 通恵さん NPO法人お助けネット 代表

1960年生まれ、函館市出身。教員として8年間勤務。退職後は2004年に「NPO法人お助けネット」を設立。親子で自由に遊べる環境を提供しながらママ友の輪を広げる。道内各地での講演や執筆活動に励む傍ら、道の教育関連の公職などにも就く。



合言葉は「ともに育ち合える喜びにありがとう」

きっかけ

20代の頃は、小学校の教員をしていました。同じ教員の夫と結婚。やりがいのある教職をもっと続けたかったのですが、育児休暇中に夫の転勤が決まり退職しました。1990年に白老町へ転居して専業主婦になりましたが、見知らぬ地域での子育てに大きな不安がありました。当時はまだ「子育て支援」という概念がなく、赤ちゃん連れのお母さんが集まるような場がなかったのです。それなら自分でママ友の輪を作ろうと考え、まずは手づくりで子育て通信を発行し、活動を始めました。

苦労

子育ての悩みは、当事者しかわからないものです。その悩みを共感してくれる方がいないと解決せず、前には進めません。相談するのは、近所のママ友であったり、子育ての先輩だったりしますが、なかなか声を掛けづらい状況にあります。当初、私たちの活動がなかなか理解してもらえず苦慮しました。若い女性が子育てで孤立しないよう、地域をあげて育児を支援していくことが重要と説きました。それには行政との連携が不可欠と考え、教育委員会などの会合にも積極的に参加し、実情を訴えました。

満足度

最初は自宅で子育て通信の編集をしていて、多くのママ友が手伝ってくれました。その中で「子育てと家事に奮闘するお母さんは身近にたくさんいる」という実情を知り、共感を覚え、そこに団結力が芽生え、大きな力へと変わっていきました。現在、常設フリースペースとなる子育てふれあいセンターには、0～3歳くらいまでの子どもと保護者が数多く集まり、笑顔が絶えない空間ができています。運営には、子育てを終えられた60代の女性もボランティアで協力してくれ、心強く感じています。

これから

少子高齢化社会が進み、高齢者が子どもたちの面倒を見る機会が増えています。夫婦共働きが定着するにつれ、女性が出産後に会社へ復帰し、管理職に就くケースも拡大することでしょう。だからこそ子育て支援のカリキュラムを充実させたい。子どもに「生まれてきてくれてありがとう」、親子が「ともに育ち合える喜びにありがとう」と思ってもらえるようお願いを込めて、この2つを“お助けネットの合言葉”とし、自然体で活動を続けていきます。

北の★女性たちへのメッセージ

子育てに悩む母親の気持ちを共有したい、との思いで、皆さんに支えてもらいながら活動しています。今はさまざまな形で情報交換ができますが、実際に会うことで悩みを解決できることが多いのです。今後も子育てをしている母親の代弁者になりたいですね。

胆振【洞爺湖町】

むらかみ

村上 さゆみさん 有限会社佐々木ファーム 取締役専務

1972年生まれ、洞爺湖町出身。佐々木農園に生まれる。大学卒業後、大手家具メーカーに就職。結婚後、夫・貴仁さんの希望で佐々木農園の後継者として1997年から就農。1999年に有限会社佐々木ファームを設立。早逝した長男のほかに長女、二男、三男の母。



大地の生命力で育てる、無農薬・無肥料の「ありがとう農法」

きっかけ

2005年に4歳の長男を突然死で亡くし、命について考えたのがきっかけでした。その頃、私たち家族は農業を諦めて出ていくことを決めていて、引っ越しは1週間後という夜、息子の心臓が止まりました。名前は大地といい、よく「ボクが家族を守るから大丈夫！」などと話していました。絶望しました。でも「大地は亡くなったけど、ここの大地になったんじゃないか」と思えて、もう一度この土地で、命を育む農業を目指そうと決心しました。ありがとう農法という名称は「消費する食から感謝の食へ」を表しています。

苦勞

夫が経営移譲を受けた2010年から、草や微生物と共存する、命を奪わない農法の実行に移りました。農地の面積は14ヘクタールありますが、3年目を迎えた時、この農法にしっかりと取り組むために、半分の畑を休ませ7ヘクタールでやることを決めました。そのために収入が3分の1になってしまい、本当に苦しい時でした。保険を解約し、生活もぎりぎりまで切り詰めました。クラウドファンディング(インターネットで多数の支援者から寄付等を受ける仕組み)に応募したのもこの時です。そこで目標額以上の、本当にたくさんのご支援をいただいたことで、次の年も農業を続けることができました。心から感謝しています。

満足度

2013年から全面積を自然栽培に移行し、2015年にやっと黒字化しました。栽培品目も年々増えて100種類を超えました。お客様はレストランなどの直接取引で、その方々がクチコミで紹介してくださり、今は120社以上になっています。この6年間、志を同じくして支えてくれたスタッフたちは、最盛期で15人ほど。20代から40代で女性が圧倒的に多いです。お客様が私たちに求めていることも「そのビジョンを達成しなさい」ということ。お客様とスタッフに本当に恵まれていると感じています。

これから

非営利の社団法人を設立しようと準備を進めています。法人名は「大地が教えてくれたこと」。一農家の利益ではなく、農業界全体に貢献できるような団体をつくり、運営していきたいと考えています。農業がなぜ存在するか、それは国民の食を、命を守っていくため。持続可能型地球サイクルの食部門を担うのが農業だと思います。しかし「そのために何をするか」を話し合う場が農業界にはありません。100年後にも残していける農業のスタイルを、農業者の方々と共に考え、行動していきたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

人には皆、その人だからこそ存在する意味があると私は思います。あなただけにしかできないことがあるから、今、あなたが存在する。一人でも多くの方にそれを見つけてほしい。「自分の命を輝かせて、得意なことで人の役に立つ」ことは、女性だからこそできると思います。

胆振【むかわ町】

もとかわ あきよ
本川 哲代さん むかわ町有害鳥獣駆除委嘱ハンター

1973年生まれ、札幌市出身。高校卒業後、スーパーに就職し総菜コーナーを担当。調理師免許、製菓衛生師の資格を取得。その後、札幌市主催の市民農業講座「さっぽろ農学校」の9期生に。農業への転身が決まりかけていた2011年に猟銃免許を取得、38歳からハンターの道へ。



シカ肉料理(ジビエ)の普及へ“むかわジビエ”を開設

きっかけ

2010年頃に「ハンターの高齢化が進み、なり手が少ない。動物を殺すことなので最近の人たちはやりたがらない」とニュースで知りました。私は小学6年生の時に、飼犬のリキを保健所に連れて行った経験があります。両親に強く反対したのですが家庭の事情で。自分がリキの命を奪ったという思いがずっと心にあり、ニュースを見た時に「私の手は一度汚れている。他の人が避けたいことならば私がしよう。動物が好きだから、命と向き合っていきたい」と思ったのが、ハンターになったきっかけでした。

苦勞

すすきの生まれで鳥の名前も知らなかったのですが、何とか試験と審査を通り、札幌市内の猟友会へ。そこで、いまの親方(師匠)を紹介してもらいました。むかわ町の山に入っているうちに「ここで腰を落ち着けてやってみる」と言われ、2012年にむかわ町に移住しました。有害鳥獣駆除隊員としてほぼ1年中、山に入っています。苦勞は、シカを運ぶのにも女性なので力が無い。射撃では何をやってもダメな日が続くこともあります。そういう時は射場で打ち込むか、逆に狩猟とは関係無い別のことをして気分を変えます。

満足度

ハンター仲間は7人。先輩たちはみんな年上です。意見がぶつかることもありますが信頼し合える仲間です。昨年、食肉処理場を自分でつくろうと取り組んできたのですが、町の補助が受けられることも決まり近く開業します。建物は、以前ハム工場だった物件をのぞいていたら持ち主の方が声を掛けてくれて、とんとん拍子に借りることができました。保健所の手続きや改装工事も人のつながりに助けられてスムーズに進みました。困ったときも助けてくれる方がいます。今はこの波に乗らなくては！という感じです。

これから

シカ肉は、犬や猫のペットフード用としても販売しています(店名:しっぽたちのごはん家さん)。よく食べて、毛ヅヤが良くなるかと好評です。農林業被害を抑えるためにエゾシカの有害駆除はしなくてはいけない。だから有効利用として肉をおいしくいただく。食べることで、山の命の循環に加わっていると考えます。“ジビエ”料理を扱うレストランも増えています。エゾシカ肉を使う料理教室や、講演の機会などもいただいていますので、家庭でおいしく食べてもらうための活動を続けていきたいと思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

人生一度きり。やりたいこと、やりましょうよ！ 今、子ども達に伝えたいこと、次の人達に残したいことの種まきをしませんか？その想いは必ず誰かが育て花となり、種子を残し受け継がれるものになると思います。貴女の「残したいもの」はなんですか？

胆振【苫小牧市】

やまぐち かっこ
山口 加津子さん 苫小牧漁業協同組合女性部 部長

1950年生まれ、苫小牧市出身。4代続く漁師の娘として浜で育つ。20歳の時に結婚し、2年後、運送業を経営していた夫が漁師に転業。現在に至る。2016年1月の第61回全道青年・女性漁業者交流大会で、女性部の苫小牧産ほっきの消費拡大活動が北海道漁連会長賞を受賞。同年3月1日からの全国大会に臨む。



浜の母さんが苫小牧のほっきを全国ブランドに

きっかけ

女性部の部長になって7年経ちます。この浜で生まれ育ち、ここで捕れる魚と貝が大好き。なかでもほっきは誰が食べても美味しいと自信を持っています。最近手軽で安い食品が多いですが、食の安全や食文化を考えると、新鮮で美味しい食材をもっと多くの方に食べてほしい、そんな思いで、女性部が中心になってさまざまなイベントに向かい、苫小牧市のほっきをPRしてきました。苫小牧市は駅周辺の商店街がさびれ、まち全体が活気を失いつつあります。そんな時だからこそ「浜」が元気をだし、まちを盛り上げていきたいですね。

苦労

女性部は現在28人。20代から60代まで幅広い年齢構成です。全道の女性部を見ても、若い世代が多い方だと思います。活動を全道、全国で展開しているので、かなり忙しいです。何かをやる時には、必ず会合を開いて、みんなで意見を出し合うようにしますが、場合によってはなかなか意見が出ないときもあります。私はあまり気にせずどんどんいこう、というタイプですが、仲間たちがそれぞれの個性や特技を活かして、部の運営に協力してくれるので本当に助かります。ここまで活動ができるのも仲間の協力があってこそです。

満足度

私は「おせっかいなおばさん」でいたい、と思っています。漁協の漁師に「嫁さん、女性部につれておいで」といつも誘っているせいか、結婚して子どもがいるのに「俺、かみさんいないから」と逃げる方もいますけどね。でも、何事も参加し、取り組んでみて面白さも楽しさも分かります。ほっきもそう。広島県でのイベントの時、ほっきを食べたことのない方たちばかりでしたが、目の前で焼いて「絶対に美味しいから」と勧めると、食べた方が「いやー、美味しかった」とリピーターになってくれました。自信を持って取り組みれば結果は出る、と信じています。

これから

今、計画しているのは、女性部で店を持つということ。夢ではありません、必ず実現させます。これまで、仲間とともに新メニューの開発や学校での食育活動に取り組んできましたが、店を持つことで、活動の幅が広がります。また、年をとって船を下りた漁師の方の働く場としても活用できます。新幹線が開業することで、北海道に大勢の観光客が来ることとなります。各地で観光客を呼び込むための競争が盛んになるとは思いますが、苫小牧市も遅れてはなりません。特に北斗市の「ずーしーほっきー」には負けたくない！と思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

昔と違って今は「おせっかいな人」が少なくなりました。物騒な世の中ですから、子育ては大変でしょう。でも、一人で悩んでも解決できないことがあります。周りには、私のようなおせっかいなおばさんが必ずいると思います。そんな人に誘われたときは、尻込みしないで参加してみてください。出会いは必ず実を結びます。



新日鐵住金株式会社 棒線事業部室蘭製鐵所

1909年、日本の近代化推進の象徴として、室蘭市仲町に創業。主力製品は特殊鋼棒鋼・線材などで、エンジンや駆動系などのいわゆる重要保安部品に多く使用される。約42ヘクタールの敷地内では、関連企業も含めて約4,000人が働く。



ものづくりの喜び、醍醐味がここに

きっかけ

2011年ごろから技術職での女性採用を本格化しています。製鉄所での作業は、自動化が進んでいるとは言っても、高温物・重量物を取り扱うということもあり、「男性中心」のイメージが強い職場であると思います。しかし、社会的に少子高齢化が進展する中で、製鉄所としての技術水準を維持・向上させていくためには、男性・女性の区別なく優秀な人材を採用・育成する必要がある、と考えたことがきっかけです。

苦労

彼女たちが今後結婚、出産、育児などに直面し、仕事を続けたいと考えた場合、どのようにフォローしていくのが課題ですね。製鉄所は3交替勤務が基本で、深夜勤務もあります。これまで、寮のリニューアルや女性トイレ設置等のインフラ整備等を進めてきましたが、今後は子育て期間中の支援策として、託児所の確保等といった仕組みの整備が必要だと感じています。男女問わず、優秀な技術者に長く活躍してもらえる基盤の整備を一層推進していきたいと考えています。

満足度

製鉄所の仕事をしっかりと理解した上で入社してほしいとの思いから、鉄鋼業の仕事・業務内容を理解してもらうようなフォーラムの開催や、採用前の現場見学会などを積極的に開催しました。実施するまでは、女性の視点で製鉄所の仕事はどう映るのか不安もありましたが、参加者からは「この仕事をぜひやってみたい」という声もあり大きな反響でした。女性技術者の採用はまだ5年目ですが、現在活躍している女性技術者はとても熱心で、先輩技術者からの評価も高いです。

これから

2015年3月に開催したフォーラムでは、初めて「なでしこブース」を設けました。先輩の女性技術者が仕事の内容や生活面などを説明しましたが、同じ女性という安心感もあってか、女子高校生が多数集まり手応えを感じています。今後も男女問わず多くの方に興味を持って頂けるように、道の「ものづくりなでしこ応援プロジェクト」への参加や、「鉄の仕事フォーラム」の開催などの取り組みを通じて、積極的に当社の魅力をアピールしていきたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

鉄は私たちが目にするもの、手にするもののほとんどに利用され、構造物・自動車・産品・生活資材に深く浸透しています。古くは文明を支え、今日では社会・暮らしの根幹であり、人類に必要な不可欠な素材です。その鉄をつくるのは人の「チカラ」です。あなたも「鉄女(テツジョ)」を目指しませんか！

日高【様似町】

たかむら ようこ
高村 洋子さん 日高女性軽種馬ネットワーク(馬女ネット) 前会長

1951年生まれ、旧・静内町(現・新ひだか町)出身。高校卒業後、日高信用金庫に就職。24歳で同じ歳の伸一さんと結婚し、高村牧場へ。馬女ネットの基になった「名牝クラブ」を49歳の時に立ち上げる。牧場の生産馬は、JRA重賞を4勝したガルボなど活躍馬多数。



軽種馬産業の復興へ、女性もどんどん前へ

きっかけ

1999年に、日高東部地区の牧場の女性で「名牝クラブ」というのを作りました。「女は黙って作業だけしていれば」という時代ではない、牧場の妻たちも馬というものに対する知識と技術を学ばなければ牧場経営は成り立っていかないと考えたんですね。発足後、他の地域で同じような考えを持つ方から「日高全域でもやってほしい」という声があがって、10年後の2009年に馬女(まじょ)ネットを立ち上げました。軽種馬産業の女性参画社会を目指して、ファーストペンギン(リスクを恐れず飛び込む開拓者)としてのスタートです。

苦労

苦労はすごくありました。当初から親睦ではなく学習団体という位置付け。「女が前に出ると牧場の衰退になる」とか、先輩女性から「名牝クラブに入るのならお宅の牧場のことはもう面倒をみない」とか。そのために入会できなかった方もいました。自分の行く道は間違っていないと思っても、当時は結果が出ていないからどう言われても仕方がなかった。一方で、軽種馬産業界の指導的立場にいる男性の方々が非常に応援してくれました。支えてくれる方々がいて、迷わずに進むことができました。

満足度

馬女ネット会員は現在約30人。20代の入会もあり、今は私が最高齢。馬の躰(からだ)の仕組み、日々の飼養管理、繁殖牝馬管理、生まれた仔馬にどう関わるか、セリ市場に向けての馴致(じゅんち)、また経理の勉強もします。牧場視察では、大手牧場のやり方を余すことなくみんな質問します。近年、若い方々の意識も育ち、高度な勉強も要求されるようになりました。もうみんなが一緒に前を向いている。会長を6年務めたので、昨年、バトンを酒井和子さんに引き継ぎました。

これから

イギリスやフランス、アメリカではゼネラルマネージャーのほとんどは女性が担っています。女性が自信を持って馬と接し、育てた馬を他国から来た方々にアピールしている。私は40歳からサラブレッドに乗り、調教もしました。経営経理の担当もしています。今では女性騎乗員も増え、経理の勉強会では開くたびに参加者が増えています。馬女ネットが今後も女性参画の“ステップ・アップ・アカデミー”として、長く存在することが私の望みです。

北の★女性たちへの
メッセージ

ためらわずに自分の一步を踏み出しましょう!女性にとって今は社会が追い風になっているのでチャンスです。夢に対して否定形で始まる大人の意見が多いですが、私は「気持ちがあるなら顔を上げて自ら動く!」、そう言ってあげられるファーストペンギンだと思っています。

日高【浦河町】

やそかわ まりこ
八十川 真里子さん

医療法人社団同行会 理事長 (児童精神科医・精神科医)

1977年生まれ、福岡県福岡市出身。静岡県浜松医科大学卒業後、同県浜松市内の病院で精神科医として勤務し、「寒がりですが、30年間雪かきする覚悟で」浦河町移住を決意。2015年10月、うらかわエマオ診療所を開業。長女7歳、長男3歳の2児の母。



共に助けあい生きていく一員として

きっかけ

精神障がいを抱えた方々の活動拠点「べてるの家」を知って、浦河町に興味を持ちました。当時勤務する静岡県浜松市の精神病院では、50年間入院したままという方も大勢いました。でも、浦河町では病気が治っていないのに、町の中で生活しているらしいと。2004年に1週間、べてるの家を見学して「これだ」と思いました。内科医の夫が浦河赤十字病院での勤務が決まり、ようやく2011年に移住。私は2人目を出産し、その子が1歳になってから、べてるの家の非常勤職員になりました。その後、1年弱ほど浜松市に戻り児童精神科について勉強し、開業の準備を進めました。

苦勞

児童精神科を開業するなら、大学の先輩もいる浜松市でと思っていました。でも、浦河町の教会学校で校長をして、家庭環境で苦勞している子やハンディキャップを持った子たちと触れ合う中で、この子たちとの関係が大事になり、もっと本格的に取り組みたいと思うようになりました。診療所に先立ち2015年5月に開設した放課後等デイサービスの「からし種」は送迎の範囲が広く、その費用が持ち出しになっています。ケースワーカー（精神保健福祉士）など有資格者の採用で、都会から浦河町に来てもらうのも一苦勞です。

満足度

日本の精神医療は入院偏重、薬物偏重とされています。べてるの家では、当事者たちが自分の生き方を決め、医師や看護師などの有資格者は介入しすぎず、応援する形です。医者も患者も一緒に生きていく仲間として、地域に受け入れられていることを実感しています。なぜ浦河町でうまくいっているのか十分説明できていなくて、他の地域に“輸出”できていません。今も研究しているところです。生活面では食べ物が全ておいしく、豊かな自然の恵みの中で、のびのびと子育てできることに満足しています。

これから

札幌市の児童精神科は初診まで平均6か月待ちなので、江別市の方からも予約をいただいています。医師としてより多くの子どもを治療して幸せにしてあげたいけれど、そのために自分の子どもを犠牲にできません。浦河町にはない24時間365日の訪問看護ステーションを立ち上げるなど、やりたいことはたくさんありますが、常に子どもがいることを前提に仕事を組み立てています。50歳になってからの10年間で、自分のやりたい仕事に打ち込めればいいのかと、今は考えています。

北の★女性たちへの
メッセージ

知的障がいや発達障がいの専門と思われがちですが、夜泣きやかんしゃく、夜尿症といった悩みについて相談に乗るのも児童精神科医の役割です。子育てで困ったことがあったら、気軽に聞きに来てよ！